

一月一八日（土）

「爺ちゃんが子供の頃もさ、門限つてあつた？」

いつものように、智希と犬の散歩に付き合っていると、孫の方から何気ない会話を切り出された。彼は私の方を見て、興味深そうに回答を待っている。私は

「ああ、あつたよ」と答えた。

「何時だったかは覚えてないけど、せいぜい夕方とか、遅くても晩ご飯までだったかな」

半世紀近く前の話を、急に思い出そうと思ってもパツと出てこない。当時は必死だったはずなのに、それが午後六時までだったのか、午後七時までだったのか、当時の実家を思い浮かべてみても、時計の針まで思い出せない。

「どうしても遅くまで遊びたい時とか、なかったの？」

「遊びたくても金はなかったし、遊ぶ場所も大してなかったな。暗くなったら帰るで十分だったよ」

「お祭りの時とかは」

「そういう時は特別に許してもらったな。必死に約束してさ」

絶対を守るからと約束するのに、そういう時に限ってハメを外して、大目玉喰らって。またその時期がやってきたら何事もなかったかのように、守れない約束をしては雷を落とされる。そういう繰り返しだったつけ。

「やっぱり、皆んなそうなんだ」

少し肩を落とした智希の様子が気にはなつたが、私は「ああ、そういうもんだ」と答えた。そういえば、幸弘からも似たような話を聞いた気がする。陽菜が万博まで紅葉の夜間ライトアップを見に行つて、門限ギリギリで帰つてきてヒヤヒヤしたと言つてたつけ。

「まあ、お姉ちゃんの場合は、お父さんもお母さんも心配だったんだろ。年頃の女の子だしな」

今月の頭に十三歳を迎えたというのに、まだまだ線が細く、背丈も思つたより伸びていない彼に、「年頃の女の子」がピンと来るかは分からなかったが、彼はそれに何も言わず、「うん、そうだね」と納得した。

「あれ、武藤さんじゃないですか」

ファミリーマートの前で、威勢のいい大きな声に呼び止められた。智希が一瞬ビククリしていたが、相手を見て緊張を解いた。彼がリードを握っている愛犬も、警戒を解いて撫でてもらっている。

「お孫さんと散歩ですか？」

私は頷いて、「まあ、そんなところ」と答えた。

「晃くんこそ、こんなところでどうしたんだ？」

「現場がちよつと早めに終わったんで、瑞希の出迎えっす」

晃くんによると、どうやら今日はJRで京都から帰ってくるらしく、駅向こうのイトインがいつぱいだったからコッチに移動してきたのだとか。

人通りが多くないとは言え、まだ午後五時前。明るいとは言えないものの、無理に出迎えにこななくても良いような気もする。

「妹想いなんだね」

私が素直に想いを述べると、彼は「それもありますけど」と一旦言葉を切った。

「明日の打ち合わせを家の外でしたくっつて」

「明日？」

「そう、明日」

そう言えば、明日は何かイベントがあるんだっつけ。幸弘も、朝から京都まで行かなきゃ行けないとか言ってたような。

「何時に出るとか、そういう話が家だとしにくいもんで」

「あゝ、なるほど」

コンビニの前で立ち話をしていると、晃くんのスマホが鳴った。どうやら仕事の話らしく、邪魔にならないように別れの挨拶をして、智希と共に彼の下を離れた。名残惜しそうにしていた愛犬を半ば引きずるようにして、河川敷へ降りていく。

ふと、智希の横顔を見ると、ちよつぱり落胆しているように見えた表情がいつの間にか、キリッとした顔つきに変わっている。目にも力が戻っているようだ。彼は愛犬のリードをしつかり握り、下流へ向けてきびきびと歩き始めた。私も置いていかれまいと、その速度に合わせて足を進める。息が弾む速さに、身も心も少しだけ軽くなった気がした。

初出 令和三年二月二日 Mediumとして公開